**セッション事後報告書**

**「アドルノ研究の現在地－－没後50年をどう捉えるべきか」**

開催日時：10月25日（日）12：30〜14：30

開催場所：オンライン（Zoom）

参加人数：32名（登壇者除く）

登壇者：世話人 橋本紘樹（京都大学・非常勤）

報告者 宇和川雄（関西学院大学）藤井俊之（京都大学）細見和之（京都大学）橋本紘樹

討論者 竹峰義和（東京大学）

報告概要：

　2019年はテーオドル・アドルノ（1903-1969）の没後50年にあたる年で、ドイツでは各地でイベントや国際会議が開かれた。節目をむかえ、アドルノが多面的に受容され学術的な研究が推し進められる中、本セッションの企図は、日本における議論も活性化させることにあった。具体的には、４人の登壇者がそれぞれ①「アドルノとベンヤミン」（宇和川）②「自己省察的な社会批判の射程――1960年代西ドイツ、アドルノ、そしてハーバーマス」（橋本）③「アドルノとドゥルーズ」（細見）④「生命批判の哲学、アドルノの二面性」（藤井）、というタイトルで発表を行った。

1. アドルノにとってベンヤミンは、自分を導いてくれる師であり、親しき友であり、同時に、自分の理解を超えた謎めいた思考の持ち主だった。1930年代、ナチスの時代に亡命者となった二人は、手紙を通じて交流をつづけるが、とりわけ芸術における「複製技術」の可能性をめぐって、彼らの意見はしばしばすれ違い、対立する。第二次世界大戦が終わると、アドルノはベンヤミンとの論争を糧として、芸術のあり方について考えを深めていった。それは、ラジオ講演『アンガジュマン』（1962）に顕著に表れている。アドルノはこの中で、サルトル – ブレヒト – ベンヤミン的なアンガジュマン芸術とは一線を画し、独自の理念を練り上げている。ただし、その説明は、他ならぬベンヤミンの愛していたパウル・クレーの作品「新しい天使」（1920）をモデルにしていた。ベンヤミンは、機械と戦争による人間像の「破壊」を新しい人間像の誕生とみなしていたが、アドルノは、クレーの絵が「奪い」「厄災」を告げる天使である点を強調する。芸術をめぐるアドルノの思索は、ベンヤミンの死後、ベンヤミンとの内なる対話を通して、そしてベンヤミンとの差異を軸に深められていったのだった。その差異の源泉は、芸術の理解を超えて、「破壊」へのまなざしそのものにあるのかもしれない。
2. 1981年に出版された『コミュミケーション的行為の理論』の中で、ハーバーマスは、『啓蒙の弁証法』に代表されるアドルノの理論を痛烈に批判した。これにより、フランクフルト社会研究所周辺の人々は大きくハーバーマス陣営と反ハーバーマスのアドルノ陣営へと二分化していく。この流れは、ハーバーマースサイドから企画された1983年と2003年の『アドルノ会議』、およびアドルノ主義者が催した1984年の『ハンブルク・アドルノシンポジオン』との対立として顕在化した。今日ではこうした分裂はもはや存在していないものの、両者を二項対立的に論じる傾向はいまだ続いている。しかしながら、1960年代において、68年運動へと向かう過激化する社会情勢を前に、アドルノとハーバーマスがフランクフルト社会研究所の一員として共闘していたことを忘れてはいけないだろう。まず、60年代前半、アドルノはハーバーマスの『公共圏の構造転換』（1962）に依拠しつつ、自らの「公共性」観を展開し、言論の自由をめぐって争われたシュピーゲル事件に端を発する抗議運動を評価していた。そして60年代末になり、議会外反対派の活動が激化してくると、両者は「理論と実践」を巡って学生運動と不和に陥る。アドルノの『理論と実践についての傍注』（1969）やハーバーマスの『認識と感心』（1968）から読み取れるのは、個人の抵抗に端を発しつつ、自己省察的な理論を媒介に「公共性／公共圏」の実現を目指す必要性であり、この点において二人の思想家は、時代に向き合う知識人として同じ方向を向いていたのだった。
3. アドルノとフランス現代思想に関しては、マイケル・ライアンの『デリダとマルクス』（1982）以来、ジャック・デリダとの同一性と差異がしばしば議論されてきた。その一方で、ジル・ドゥルーズとの比較はあまり問題にされてこなかったように思われる。しかし、そもそもプラトン以来の同一性の哲学の転覆を企て、しかも、カフカ、ベケットをはじめとしたモダニズムの芸術を背景としてそれを試みるという点において、両者のあいだには明確に並行関係が存在している。実際ドゥルーズは、1988年のインタビューの中で、「投瓶通信」という「アドルノのモデル」について肯定的に語っている。1988年という年にも注意が必要である。ハーバーマスが1983年3月にパリのコレージュ・ド・フランスで行った講義も含んだ『近代の哲学的ディスクルス』（1985年）をすでに出版しており、そこにはフーコーとデリダにたいする批判が組み込まれていた。ドゥルーズが「アドルノのモデル」を推奨した際には、ハーバーマス・モデルのコミュニケーション的理論ではなくて、という含意もあったにちがいない。さらに、ガタリとの最後の共著『哲学とは何か』のなかでは、アドルノとフランクフルト学派の名をあげて、脱領土化と哲学を結びつけたときに生じる「概念の非命題的形式」が、アドルノの「否定弁証法」およびフランクフルト学派の「ユートピア」と近似していると述べられている。こうした点を踏まえ、あらためて、フーコーやデリダ、レヴィナスを含めたフランス現代思想の哲学者たちとアドルノを比べてみると、モダンとポストモダンの対立がいかに表層的なものかがよくわかる。アドルノとドゥルーズ（とガタリ）に関しては、前者を表地、後者を裏地とする大きな一枚の布というイメージすら思い描くことが可能で、その関係は、ドゥルーズが晩年に精力的に書き続けた映画論にまで繋げて考えることができるだろう。
4. アドルノの思想には様々な二面性を指摘することができる。たとえば、「非同一性」の概念である。ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』では、「啓蒙」という名の「自然支配」の原理が批判の対象にされ、この意味において、自然支配から逃れる「非同一性」はアドルノの議論のなかで、いわば「良きもの」として表れている。しかし、このようにして暴力の対象とされる非同一的なものとは、単に善なる存在としてあらかじめどこかに存在しているわけではない。アドルノの議論の前提にあるのは、非同一的なものは、主観の同一化の作用によって生み出される、ということなのだ。そして、アドルノが構想する「同一化」には、主観へのとりこみと対象への形式の付与という二つの側面がある。とりわけ、後者は、対象に形式を与えつつ、自らを主観として成立させるという機能を同時に果たしている。主観と客観が同時に成立するプロセスこそ、アドルノのいう同一化なのである。こう捉えた時、同一化のプロセスは単に自然に対立するものではない。むしろ、同一性を成立させる起源としての自然を考えるべきだろう。アドルノ思想の根底にある、一つの概念が同時に正反対の意味を持つという二面性は、『啓蒙の弁証法』においては「人間」の二面性として、18世紀に端を発する彼の歴史的パースペクティブにおいては「個人」の二面性として表出している。自然の二面性に関していえば、その片面は生命批判の哲学によって構成されている。そして生命批判を自己保存への戒めであると考えてよければ、それはまた自己批判のことでもある。自己というものが、その同一性の確立において、同時に非同一的なものとしての対象を生み出すものである限りにおいて、この自己が単に盲目の自己保存に従うのではなく、自らの自律を獲得することで「単なる自然」を抜け出すところにこそ、自己と自然との宥和は成し遂げられるはずである。自然から抜け出すことによってこそ自然との宥和は成立する、という逆説がここにも見受けられるのだ。アドルノの思想の要諦は、常に現在の自己に関わって同一性と非同一性の線引きを問い直すという点に、すなわち、自己が自己でないものへと生成することにあった。

以上の発表に対して、討論者である竹峰義和先生より、以下のコメントをそれぞれ賜った。

1. 「破壊」というモティーフをめぐって、ベンヤミンとアドルノの間にはたしかに差異がある。ベンヤミンは、破壊が全てを「タブラ・ラサ」のような状態にし、その後に解放が生まれてくると捉えていた。一方アドルノは、そうしたラディカリズムを批判しつつ、破壊という契機に、システムに内在する矛盾を突破するような解放的契機を見出していたのではないだろうか。
2. ハーバーマスを参照軸にしながら、アドルノの思想を浮き彫りにして行く試みだと捉えることができる。アドルノは「理論と実践」の問題を単純に分割するのではなく、ある種複合的に考えており、非実践的と評価されがちではあるものの、彼の思想や活動はある種の実践性を有するものであった。では、そこにどのような戦略性を読み取ることができるだろうか。
3. アドルノとドゥルーズはともに、超越的な視点からではなく、ある意味「力の場」として社会を捉えているという点で共通している。また、アドルノ美学の脱主体的な契機は、ドゥルーズにも繋がっているだろう。それに対して、投瓶通信というメタファーに関しては異同があるように思われる。アドルノがそれをアレゴリー的に捉えていた一方で、ドゥルーズは自らの哲学が他の思想家に拾われるという意味で語っていたのではないだろうか。
4. アドルノにおける自然との宥和というモティーフは、疎外論的な図式に回収されてしまう危険性を孕んでいる。しかしその一方で、『美学理論』における「芸術美」の概念は、そこから逃れるポテンシャルをもっているのではないか

その後、参加者との質疑応答に移った。質問者には、Zoomのチャット機能を用いて質問がある旨を伝え、カメラをオンにしてもらい発言してもらった。発表者の細見と藤井に対して大きく二つの質問が出た。

質問１：ドゥルーズとガタリは『アンチ・オイディプス』では「革命」を考えていたが、『哲学とは何か』にいたる過程で現状に対して悲観的になっていった。アドルノの「投壜通信」のモデルによせた共感はその中で生まれてきたものだった。では、アドルノ自身にはそういう変化はなかったのか。

答え　：アドルノの基本思想は、ナチス政権の成立の直前である1930年代初頭にはほとんど固まっており、アウシュヴィッツ以降に大きな変化があったとは思われない。あえて付言すれば、20歳以前は、レーニン主義者であったことが窺われるくらいである。（細見）

質問２ ：たしかに、主観の同一化の働きを生命の自己保存の働きとして捉えることは可能である。しかし、それを社会の個人に対する強制と同じものだと考えてよいのか？社会には生命の自己保存とは別の原理が働いており、その把握にアドルノの社会批判のダイナミズムはあるのではないか？

答え　：たしかにその点は考慮すべきである。ただ一方で、アドルノの社会概念がどこまで具体的に「社会」を捉えられているかは不分明である。全体がバラバラの個人を直接支配するというアドルノの社会批判には、自発的な世論の形成の場としての「社会」が欠けている、というハーバーマスやホネットの批判は、留保が必要であるものの、いまだ検討に値する。（藤井）

時間の都合上、あまり多くの質問を受け付けることができなかったため、セッション終了後にメールでの質問を受け付ける旨を伝えた。後日、藤井の発表に関して、ジャズ論との関わりから１件質問があったことを記しておきたい。

全体を通じて非常に有意義なセッションとなり、今後アドルノ研究をさらに進めて行く上で極めて大切な場となった。あらためて、討論者である竹峰義和先生とご参加いただいた学会員のみなさまに、心よりの感謝を申し上げたい。